

FD 研修報告

物質生命工学コース

生命機能化学講座

伊東 忍

2010年3月8日(月)~21日(日)に、California State University, Fullerton 校で行われたFD研究に参加した。当専攻からは今回が3回目の派遣であり、時間割やプログラムおよび授業の詳細な内容については既に多くの先生方が報告済みなので、ここでは省略させて頂く。二週間という短い時間ではあったが、総じて有意義な体験をさせて頂いたというのが本心である。若い頃(29才の時)に1年間、博士研究員としてUniversity of California, San Diego に留学したことがあるが、その時は「研究」が主たる目的であり、殆ど研究室の中で実験をしていたので、アメリカの大学教育制度に関しては無頓着であった。また、当時は自らが英語で授業をしなければならないという立場でもなかったため、アメリカで行われている授業の内容や方法についてもあまり関心はなかったし、授業を参観する機会もなかった。ところが今回は「教育」が主たる目的であったため、全く違った観点からアメリカの大学を見直す事ができた。これまで、日本の大学でも行われているFD研修には殆ど参加することなく、授業は片手間のよう考えていた。しかし、今回FD研修に参加して、授業に対する考え方が大きく変わったような気がする。これからは「Eye Contact」と「Body Language」を駆使して、教室の中を「Walking Around」しながら、「Group Discussion」なども取り入れ、学生の理解度を「Observation」しながら、学生との「Communication」を十分にはかり、「Interactive」な授業を進めて行こうと思った。授業に使うスライドは「5 x 7 Rule」(一行5単語、7行まで)を心がけて作成する。授業の始めには学生の「Attention」を引きつける「Topics」や「Self-introduction」も必要である。話題を切り替えるときの「Transition」も大切だ。Cindy(英語の教師)から「あなたの英語は速すぎる」と注意された。これまでも何度か同じような注意されたことがあったが、今回の助言は説得力があった。これからは「Pronunciation」に注意しながら、「Rhythm」の良い「Presentation」を心がけようと思った。自分の言いたいことは、70%の「Body Language/Nonverbal Communication」と30%の「Actual Words」で伝わる、と聞いて、少しは気が楽になった。Cindyのアクションたっぷりの発音練習も、この年になって今更と思いつつ、まるで中学生になった気分を楽しめた(福住先生にはできないだろうな~と思いつつ(;))。実際の授業参観と、アメリカの学生を前にした授業実施。今となっては全てが新鮮で楽しい経験であった。毎日授業の後に皆さんで行く、Cindyお薦めの「IN-N-OUT」,「Thai Basil」,「Chipotle」,「Yogurtland」,週末の「Palm Springs Outlet」もとても良い思い出となった(St. Patrick's DayのGreen Beerを逃したのは心残りだったが)。もし、今後のために少しだけ言わせて頂くとするならば、Tutorの専門分野とのマッチングの向上、授業参観の自由度の拡張、大学院教育に関する研修の充実、などが挙げられるであろう。最後に、今回お世話頂いたFullerton校の諸先生方、ならびに事務職員の方々に心より感謝申し上げたい。また、ご一緒させて頂いて楽しく過ごせた、原島 俊先生、渡邊 肇先生、金子嘉信先生、松永幸大先生、山田裕介先生、および本研修プログラム

の全体をお世話頂いた金谷茂則先生、日本側の事務手続でお世話になった松本玲子さんに心よりお礼申し上げます。

平成 22 年度の第一回目大学院授業「生命機能化学」(英語コース)を終えて

